

エッセンシャルワークの視点から 経済・社会の再構築を

東京大学大学院教育学研究科教授 本田 由紀

◆パンテミックが可視化したエッセンシャルワークの重要性

新型コロナウイルス感染症拡大下で、医療や保育・介護、あるいは生活用品の販売や流通にあたる、いわゆる「エッセンシャルワーク」の重要性は誰の目にも明らかとなった。次々に医療機関に送り込まれる感染者に対し、防護服に身を包んで治療にあたる医師や看護師の懸命な努力が繰り返し報道された。感染防止のために保育所や介護施設が閉所になった際には、それまで日々乳幼児や高齢者を預かってきていたそれらの施設がいかにありがたい存在であったかが骨身に沁みた家族も多かったはずだ。あるいは、特に感染者数の増加が著しかった大都市で、様々な必需品を届けてくれる配達員、消毒や換気に苦慮しつつ店を開けてくれる店舗によって、数多の家庭・世帯はようやく生活が回っていた。

人々の生命や安全や生活に直接にかかわるエッセンシャルワークは、経済・社会の機能の基幹を形成している。しかし、それらが置かれている状況は概して厳しい。

◆「ケアレス」な社会におけるエッセンシャルワークの貶め

周知のように、エッセンシャルワーク、特に对人的な「ケア」を行う仕事は、賃金水準が低く、そのため人手不足になりがちであり、それゆえ過重で長時間の働き方になってしまう場合が多い。人の生命や健康、成長や幸福に関わる重要な仕事であり、専門性も必要とされるにもかかわらず、である。その理由としてこれまで指摘されてきたことは、こうしたケアに関わる仕事の担い手には女性が多く、また非正規雇用で働く場合も多いことなどである。1970～80年代に政府が提唱していた「日本型福祉社会」は、こうした对人的ケアが日本では家族の中で主に女性によって担われていることを「美風」とみなしていた。その後、少子高齢化や女性の就労率の上昇により、介護保険の導入、保育機会の拡大などの施策が導入されて、ケアは家庭の外でも行われるようになってはきたが、依然としてその担い手や仕事内容は家族内で日常的に行われていたことの延長とされており、報酬など労働条件は低いままに据え置かれている。

それと表裏一体の事態は、権力や発言力の大きい「公的」な仕事を占有している男性たちが、他者のケアをするどころか、日常的なケア（家事・世話）を家庭内

の主に女性に依存してきたという状況である。これは「ケアレスマン・モデル」という言葉で表現される。日本の国会議員は男性の比率および平均年齢が国際比較で見ても異常に高いが、これはケアの責任を自ら担った経験を持たない「ケアレスマン」が、様々な法律や制度を決めていることを意味する。ケア労働への侮蔑の基底にあるのはこうした構造である。

◆エッセンシャルワークが尊重・重視される経済・社会のために

こうした構造を変えてゆくためには、複数の方向からの変革が必要となる。

第一に、エッセンシャルワークの労働条件を向上させることである。特定最低賃金制度を適用して当該の業界全体の報酬水準を上げてゆくこと、ケア対象者の人数などの基準を改善すること、施設経営者に報酬が偏らないよう外部からの点検と是正を実効化すること、そのためにも労働者がユニオンなどの形で強く声をあげてゆくこと、報酬の原資として利用世帯は応能負担を原則とすることなどを提唱したい。そして何よりも、法と制度を決める政治の場に、ケアレスマン以外の多様な人々を送り込むことが必要である。

第二に、ケアを専門的に仕事とする者だけでなく、すべての生活者が主に家族内での何らかのケアを担うことが求められる。特に、性別役割分業がいまだ強固である日本では、男性もケアを担い、女性も収入や発言力を確保するという、分業の均等化が不可欠である。身をもってケアを担当した経験を持つことが、仕事としてのケアへの敬意や尊重につながるはずだ。

第三に、仕事としてのケアの地位向上、家庭内でのケアの普遍化に加えて、施設や家族という閉じられがちな場所を超えて、多様な立場のケアする／される者が入り混じって過ごせる物理的な空間の拡充も期待される。それによって、一方向的にケアする／されるという非対称な関係や役割を解きほぐし、相互にケアし合うという水平的・混淆（こんこう）的な関係を生み出してゆくことが可能になると考えるからである。

いずれも容易ではない課題ではあるが、深まる格差や孤立を是正してゆくためにも、エッセンシャルワーク、ケアワークに、適切な位置づけを与えてゆく社会変革は不可欠である。

(ほんだ ゆき)